

第 16 回中医学会勉強会 漢方応用講座

講師： 路京華 老師

レポート：岸奈治郎（館林厚生病院漢方内科）

開催日：2015 年 6 月 4 日

今回も目の前の症例を弁証するトレーニングということで、治療経過は追わずに、症例を弁証し検討することを主眼に置いています。

いつもどおり症例を提示しその場で弁証します。平馬先生と陳先生が白板に自分の弁証・治法を示し、それに対して路先生が質問をするというスタイルで進行しました。

【症例】

52 歳男性

主訴) 眩暈

現症)

10 年前から眩暈があり治療目的に受診した。

既往歴)

高血圧 10 年間 (190/120mmHg)

2 型糖尿病 脂質異常症

現症)

眩暈、頭が重い、頭が張って痛い。顔面紅潮、自汗、眼瞼浮腫、口渇があり水を飲みたい。食欲はある。大便是柔らかく形にならない。日に 3 回あり。酒が好きで毎日沢山飲んでい

る。

小便の回数が多い。

イライラしてよく怒る。

寝つきが悪く、夜中によく目が覚める。

脈：弦緊

舌：胖大 淡紅色 薄白苔 齒痕を認める。

~~~~~ここまでの情報を整理して弁証、治法を組み立てました~~~~

平馬先生)

〔病性〕裏実熱

〔病勢〕 邪正  
〔病位〕 肝脾（心）  
〔病邪〕 気滞 火 湿  
〔弁証〕 肝気鬱結 化火上亢 肝脾不和 湿困脾胃  
〔治法〕 疏肝理気 沈肝熄風 健脾化湿 寧心安神  
〔処方〕 柴胡 6 白芍 9 香附子 6  
釣藤鈎（後下） 6 天麻 6 百合 9  
知母 6 白朮 6 茯苓 9  
竜骨 10 牡蠣 10 生甘草 4

〈陳先生〉

〔病性〕 裏虚実錯雜  
〔病勢〕 正虚邪存  
〔病位〕 肝胃肺  
〔不足〕 肺陰 胃陰  
〔病邪〕 肝風上亢 痰湿  
〔弁証〕 肝陽上亢 肺胃陰虚  
〔治法〕 平肝熄風 清養肺胃  
〔処方〕 天麻釣藤飲加麦門冬湯

〈岸〉

〔病性〕 裏熱実  
〔病勢〕 邪実  
〔病位〕 肝脾  
〔病邪〕 湿熱  
〔弁証〕 肝気鬱結 痰湿困脾  
〔治法〕 疏肝理気 健脾化湿  
〔処方〕 抑肝散加陳皮半夏 温胆湯

＜路老師の分析＞

この患者は脾胃虚と肝鬱による疏泄不良がある。脾は昇精を主り水を裁くので、脾虚となれば精気は上がらず湿も溜り下注する。肝の疏泄作用が損なわれれば気を巡らせる作用が滞る。気・陽気は温かく上に昇る性質があるから、疏泄されなければ降りることが出来なくなる。

昇るものが昇らず、降りるものが降りない状態を「上盛下虚」という。上盛は顔面の紅潮、ほてり、イライラなどがそうであり、精気が上がらなければ脳を養うことが出来ず眩暈が

起こり、疏泄不足により肝陽内風を生じ眩暈がより酷くなる。下虚では排尿回数が多いなど腎虚を思わせるような症状がある。下の陽気が上に行ってしまったので、排便回数が増えるなど陽虚の症状が見られている。上では実になり下では虚になる、虚実兼雑となる。

下では湿が溜まり上では内風により乾燥が起こり燥湿相合している。

舌苔が黄色くないのは、上記のような原因で陽が消耗して（虚して）おり熱が出る事が出来ない。そうすると陰と陽が分裂した状態になってしまう。熱は肝陽があがったためによる熱ではあるが、陽自体は虚しているので直接熱を冷ますような薬は使いにくい。

舌は胖大で陰虚は考えにくい。湿によって胖大になっている。頭重、むくみなどの症状もあり、まずは水分を取る治療をするほうが優先である。

木旺克土：木が旺盛だと土を抑制してしまう。肝が旺盛だと脾が克されている。脾の昇精作用が障害されると陽気が上にあがらない。脾の利水作用が障害されると水が溜まってきてしまう。水がありすぎて邪魔をしている。邪魔されると口渇が出現する。

良く汗をかくのは、水分が上に滞っており、肝陽が上亢しているため熱で汗が出る。

上では熱が起こり、湿は陰邪であるから冷えるため寒熱も並存している。

下は下痢をして虚している。裏が虚しているのだから、上のほうに熱があっても舌が赤くなったり黄苔が出たりすることはない。つまり黄芩などで冷ます治療はするべきではない。

上下で、気・湿・熱に関して離解した錯雑状態となっていることが分かる。

こういう場合の治療としては原則的に上のものを下に、下のものを上に混ぜることで治療になる。

この症例の場合の不眠は上のほうの興奮状態が原因なので、酸棗仁湯のような薬を使っても良くはなりません。上を冷まさないと駄目です。上下の状態をよく把握する必要があります。

こういう場合には人参や黄耆は使いません。脾気を壅滞させたり肝気を煽って暴走させたりするからです。脾気を補いつつ滞らせない、湿があれば排出させます。湿を取るのに半夏や黄連などの苦寒薬を使うと陽気を傷つけるので使ってはいけません。

※日本人は胃腸が弱くて気を作るのも弱い。気を沢山作る人が「気が強い」。

弁証：肝鬱陽亢 心神不寧 脾虚湿阻 清陽不昇

治則：沈肝潜陽 疏散頭風 健脾化湿 輕拳清陽

沈肝熄風 上がった陽気を押さえ込む。

疏風 発散させて巡らせる。

「見肝之病，知肝伝脾，当先実脾，四季脾旺不受邪」（金匱要略）

肝の病気は脾に伝わるのが分かっているから、脾を充実させれば肝からの邪を受けることはない。

「上者下之、下者上之」

上に昇ってしまったものは下に引き下げて、下に下がってしまったものは上に引き上げる。今回の症例の清陽不昇というのは清陽が昇らないので眩暈になったわけではなく、脾虚湿阻があって脾虚で気虚下陷になってしまって下痢になっている、ということです。

〔第一診の処方〕

天麻 12            釣藤鈎 10 後下    生石決明 20 先煎            …沈肝熄風  
竜胆 6    …少な目の竜胆は苦寒薬で脾を痛めてもいけないので少量にしている。  
菊花 9            …肝陽化風の時によく使う。桑葉もよく使う。  
葛根 10            …気を上に上げる。  
川芎 6            …気を揚げ巡らせる  
炒杏仁 9            炒薏苡仁 30        藿香 9 後下        佩蘭 9 後下        芳香化湿  
炒蒼朮 9            炒白朮 10    …脾胃を補う。湿を捌く。  
厚朴 9    …燥湿作用  
滑石 20 包  
青皮陳皮各 9        菖蒲 12            生谷麦芽 12        …軽くて化湿和中し脾胃を補う  
14 日分

●佩蘭 はいらん 辛平 脾胃肺 キク科フジバカマの全草  
藿香と同様に芳香化湿薬でお互いに相須である。脾胃の湿を散じ、暑邪、湿温証に用いられる。藿香に比べて中焦の去湿作用に優れているが解表作用は無い。化湿解暑・和中。

●石菖蒲 辛温 心胃  
強い芳香性で化痰開竅する。蘇合香よりは化湿作用は弱い。また脾胃の湿濁をのぞき化湿和中する。

※炮炙（ほうしゃ）

ここでは杏仁・薏苡仁・蒼朮・白朮に炮製の炮炙が加えられている。炒は鍋で炒めることで消化吸收を良好にする目的で行われることが多い。

- 1) 炒黄：表面が黄色となり香りがするまで弱火でさっと炒める。脾胃機能の促進、寒性の緩和などの目的に行われる。
- 2) 炒焦：表面が褐色になるまで中火で炒める。主に消化吸收を助け促進する。
- 3) 炒炭：表面が黒くこげた炭のようになるまで強火で炒める。止血作用を増強するために行われる。